

Title	人生の意義及び価値 (其五) : ルードルフォイケンの新人生観
Sub Title	
Author	川合, 貞一
Publisher	三田学会
Publication year	1910
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.4, No.1 (1910. 7) ,p.53- 59
JaLC DOI	10.14991/001.19100700-0053
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19100700-0053

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

人生の意義及び價値 (其五)

(ルトドルフオイケンの新人生觀)

川合 貞一

オイケン教授の新人生觀を述べて既に四回に及ぶ而未だ其の半にも達しない是迄踏み來れる歩調を以つて進んで行くことにすると尙六七回を要するかくは餘りに長きに亘るの虞があるから茲に渠の新人生觀の概要をかい撮んで假りに結尾とする是れが果して醍醐の味であるかは余の知る所ではない他日閑暇があれば充分補足して以つて世に問ひたいと思つてゐる讀者之を諒せよ

現今盛んに世の中に行はれぬる哲學を一言以つて之を蔽へば學究哲學である
と謂つてよい學究哲學と云ふものは多くは人生との關聯を斷つて冷靜な態度で
零細な研究に従事する従つて血の氣のない思切り抽象的な主知主義インテレクチュアリズムに陥つて了
つて時代の精神生活を深めることには殆んど没交渉である所がかう云ふ學究哲
學の傍に通俗哲學なるものが行はれてゐる通俗哲學は主として美的文化の爲め
に力を盡しローマンチックに結び付かんとしてゐるのであるがどうも皮相的な

54

るを免れぬ従つて人生の本體に徹底し得ない趣がある。

かう云ふ唯^{エステチズムス}美主義、主知主義並びに自然科学の中に存する自然主義に極力反對するのがオイケン教授の畢生の事業なのである。渠は科學の小天地に踞踏するものではなくして徹底的思惟に由つて現代の危機を看取し内的眞理と内容とを人生に與へて之を深めやうとするのである。要するに渠の哲學は人生の一層大なる深みと本體とに達せやうと云ふ努力奮闘なのである。而して渠の要求する所は吾々の思惟に於いては人生其物から出發しなければならぬと云ふことである。即ち抽象的概念の系統で以つて世界及び人生を包んで了ふのではなくして人生の深みを尋ね其の必然を理解すべしと云ふのである。そこで研究の問題も人生其物から直接に起つて來るし又人生の爲めに解決せらるべきである。つまり „Kampf um einen geistigen Lebensinhalt, — 精神的内容の爲めの奮闘 — 是れが渠の哲學の核心であるのだ。茲に云ふ人生なるものは所謂經驗的實際的人生を指して云ふのではないことは明かである。而して研究の主眼は眼の前に存在する所の現實を説明するのではなくして人生を發見し喚起しやうと云ふのである。此の研究を爲

すに方つて渠は人間が自然を超越する事實から出發するのである。

人間が自然を超越する第一歩は世界の意識に現れてゐると云ふのは吾々は意識的に全體としての世界に自分を對立せしめるかくて其の束縛を脱するのである。それからして又吾々の思惟なるものが時間の關係を離れる思惟は眞理に達せやうと努力するのであるが其の眞理なるものには時間の制限はないのである。それからして又自然に於いては常に個體の自家保存と云ふことのみが行はれてゐるのであるが然かし人間の間には特有な内容と財寶とを有する内的關係が生じて來るのである。即ち家族とか國家とか社會とか云ふ生活圏が生じて來る。而して是等の生活圏は屢全く個人の自家保存と矛盾するやうな要求を爲すのである。人間には小我の經驗的利害を顧みずして云爲し得るの可能性が與へられてゐる。我を忘れて眞に相愛し眞に相憐むの可能性が與へられてゐるのである。是に由つて觀ても人生の自然を超越することが分る。

又人間と其の勤勞との關係を見ても新生活を認めることが出來る自然に於いては到る處實利の考が行はれてゐるのであるが人間に於いては之を全然捨て、

55 了ふことが出来るのである無論其の始めに方つては勤勞を以つて外部から課せられた外的生活の保存に必要なものであるかのやうに思はんでもないが之れが段々消え失せて了つて勤勞の爲めに喜んで勤勞を爲すやうになりかくて吾々は勤勞に由つて一層の自由を得一段の大を増すのである

吾々の本質の中には自然と全く異つた尙幾多の點が存してゐる人類の歴史を通じて全環境を思想化する過程は益々進みつゝある人格とが國家とか人類とか云ふ觀念は即ち吾々の生活を指導する所の思想であつて感覺的自然とは似寄もつかぬものである而して又吾々は世界を度るに非感覺的な範疇を以てする數學が物的世界を法則に由つて理解する力を吾々に與へるのは即ちそれであるで何處に於いても最初の印象は思想の力精神の力に由つて變形を受けるかくして始めて科學が成立つのであるかくして始めて世界が出来て來るのであるして見ると精神が元で世界は導き出されるものであると云はなければならぬ無論感覺的のものが消え失せて了ふのではなくして其れが精神化せらるゝのである それからして又一つの點は思惟が吾々の上に特有な力を有つてゐることである吾々

は吾々の生活の中に矛盾を發見すると其れを其の儘に打捨て、置くことは出来ぬ内的力が之を解決すべく強要するで矛盾を解決することが人生の主なる任務となるのである

がさう云ふ新世活は如何にして生じて來るであらうか人間の中に存して而かも人間を超越するやうなことがどうして出來得らるゝであらうか此の矛盾を解決するにはどうしても形而上學に由らざるを得ぬとオイケンOppekenは謂てゐるが渠の謂ふ所の形而上學なるものは唯思惟から出て來る形而上學ではなくして全生活から出て來る所の歸納的形而上學なのであるで精神生活の中に於て人間に優越した世界生活を認識するにあらずんば人生の矛盾は到底解決し去るに由しないと云ふのである精神生活は周圍の世界の眞の深みと人間の本體とを形成してゐる精神世界と關聯してゐるものであると見て人生が始めて搖がざる地盤を得るのだと云ふのである

57 オイケンOppekenは其の研究の中に於いて人間の歴史上には如何に觀念が其の力を現すかを指摘し人間が如何に其の共同勤勞に由つて内的關聯を得るかを述べてゐる

る而して人生に於いては殊に自由の必要を喧しく云つてゐるで若し吾々が自由を捨て、了へば自然を優越した精神生活なるものはあり得ないのである吾々は自分の力に由つて世界を進捗せしめなければならぬ而して吾々の生活が意義を有せんには世界も人間も前以つて出来上つてゐるものであるべきではないして見ると自由と云ふものは全く精神生活の要求であり必然であると云はなければならぬ然り而して個人に於ける獨立的精神生活の傾向を示すものは規範の存在である此の規範なるものは自然生活とは異つた吾々に特有な生活の發展であると見て始めて其の大なる力を有することが説明されるべきである

精神生活なるものを詳細に考察すると眞理及び現實と云ふ二觀念も變形を受けなければならぬことになる眞理と云ふは精神世界を内部から理會することであつて眞理に對する要求は生活が特有な高處に前進することに外ならぬそれで精神生活を進めることが眞理の標準となるのである従つて眞理は個人的性質を帶んで來るのであるで自分自づからの眞理でない眞理は自分に取つては完全な眞理であると云ふことが出来ないことになる次に現實と云ふのは——眞の現實

と云ふものは即ち精神生活を指して云ふので決して與へられたものではない理想的概念なのであるそこで人間と世界の關係が一種特別なものになるといふのは人間が世界を照すのではなくして人間の中に世界が輝いて來るのであるが吾等は吾々の思惟に於いて唯考察に止つて居るのではなくして事物に由つて益々之を作り上げて行くのである無論生活の中心は心靈の自在に寛められなければならぬにもせよ吾々の生活は唯一方向にのみ向ふものではない自づからを完成し之を有力ならしむるには精神生活は斷へず經驗の世界に復歸せなければならぬが經驗と云ふものは自家活動の地盤の上に移されて始めて内的向上を爲すのであるかくて經驗的世界の精神化が行はれ是れに由つて人生が大くなり廣くなりもて行くのである人間の本體の自家向上となり自家發展となつて行くのである

是れがオイケンの新人生觀であるオイケン自身は之を *Aktivismus* と呼んでゐる (完)